

NPO法人 能登半島おらっちゃんの里山里海

ー世界農業遺産「能登の里山里海」伝承と協働のプラットフォーム創出事業ー

<http://www.satoyama-satoumi.com/oraccha/>

大学・行政・NPOの連携が最大の強み



2006年、珠洲市内の廃校となつた小学校校舎に、金沢大学が「能登半島里山里海自然学校」を開校。この活動に呼応する形で誕生したのが、地元有志による「NPO法人能登半島おらっちゃんの里山里海」。自然学校周辺の保全林の管理作業や、荒廃した水田のピオトーフの復元・維持作業などを行っています。また、同じ施設内には珠洲市自然共生室の研究員も常駐しており、大学・行政・NPOの三者が同施設で活動することで、地域の環境保全活動の中心的な役割を担っています。

活動拠点は
廃校となつた小学校

ワークショップで
里山里海の自然・文化を継承

現在、同団体が力を入れているのが、里山里海の技術・文化を伝えるワークショップの開催です。その中の一つに、「旅する蝶 アサギマダラの捕獲調査」があります。5月のワークショップでは、23日の夕方、チョウの専門家を招いて勉強会を開催。翌日の早朝、能登半島の最北端・狼煙（のろし）漁港に集まり、調査を行いました。



放置された農業用ため池を手入れし、自生するジュンサイを地元の料理店や京都の卸売業者へ出荷



会員の手入れでよみがえった森。散歩道が整備され、子ども向けのイベントなども開かれている



スナビキソウが好きなアサギマダラ。北上する季節になると、特に珠洲で多く観察される



捕まえたアサギマダラの羽に捕獲地、捕獲日、捕獲者名をマーキングして放蝶

スナビキソウに集まりますが、初参加組は思つたように捕獲できません。しかし、捕れたときの感動は大きく、「こんな小さいのに遠くまで北上するなんて不思議だね」「マーキングしたチョウを誰か捕まえてくれないかな」とか、「砂浜を大事にしないと、こ

こには来なくなってしまう」といった声が聞かれました。ワークショップの参加者は20〜40代で、子ども連れも多いそうです。加藤理事長は「これをきっかけに若い世代が保全活動にも参加してくれる」と話します。

協働・連携で 成功した

2つの事例

地域の自然資源・里山里海を生かす

環境で地域を
元気にする！



NPO法人 森は海の恋人

ーリアスの浜における湿地・干潟保全活動に基づく地域再生ー

<http://www.mori-umi.org/>

成長の原動力は外部支援者とのネットワーク



1988年「牡蠣の森を募う会」としてスタートし、2009年に「森は海の恋人」と改称してNPO法人化。今年で27年目を迎える活動は、国内はもちろん、海外にも広く知られていきます。これほどまでに有名になった理由は、何でしょうか？ 同団体の島山信副理事長はこう説明します。

積極的な情報発信で
基本理念をアピール

そうした中から生まれたものです」積極的に対外発信する一方で、地域内の連携にも長い歴史があります。その代表例が設立当初から続いている植樹祭。これは山間部に位置する岩手県一関市室根町の自治会と「牡蠣の森を募う会」の地域間交流として始まった取り組みで、「森は海の恋人」の活動を展開する上で象徴的なイベントとして定着しています。

新たな自然資源・湿地を
地域再生の起爆剤に

東日本大震災で三陸沿岸一帯は甚大な被害を受けました。厳しい状況の中にあつて、同団体は、従来の活動に加え、新たに舞根湾環境調査や震災後の自然環境を活用したまちづくりを始めました。



震災後、舞根地区に形成された湿地。現在、170種の生物が確認されている



伝説となった恒例の植樹祭。第27回の今年は全国から約1,500人が参加



環境保全事業の新たな拠点として2014年に建設された「舞根森海研究所」



15の大学と連携し、震災後、定期的に実施されている舞根湾での生物調査

も生かしています。また、震災後の自然環境ですが、この舞根地区に新たに湿地帯が形成されました。かつては耕作放棄地でしたが、これを新たな自然資源と捉え、湿地を守ることで地域再生のきっかけになればと考

えています」と島山さん。被災しながらも、自然との共生を念頭に環境保全活動に取り組んでいる「森は海の恋人」は、これからも多くのの人々に影響を与え続けるでしょう。